

第4章 館林市の歴史文化の特性

1 館林市の歴史文化の五つの特性

第2章及び第3章までに示した本市の特徴から、歴文構想策定にあたってその歴史文化の特性を検討し、5つの分類にまとめた。

(1) 水辺と台地が育む風土

水辺や台地など地形的要素から恩恵を享受する本市の生活文化。特に市内にある5つの沼との共生により、「里沼」の息づく重厚な歴史文化が育まれてきた。

(2) 境目の地域の交通と交流

周辺に往来を阻む山がなく古代から絶えない「境目」地域の交流。交通を基軸として境界を自由に行き来する独特な生活・文化圏が形成されてきた。

(3) 館林城と城下町

中世期の築城以後、近世期に発展を遂げた館林城とその城下町。地域の政治や経済、文化の拠点として文化財や建造物のほか、生業や年中行事、習俗祭礼などが現代まで受け継がれてきた。

(4) 近郊都市文化の発展と賑わい

明治期の鉄道開通を起点とする近代産業の発展とまちの近代化。地域の豊かな自然・芸術と融合した、「東京近郊」の都市文化が発展し、まちに賑わいを生んできた。

(5) 館林の名所・名産品

つつじ古木群がある「躑躅ヶ岡」や“分福茶釜”伝説の「茂林寺」を中心に一大行楽地として成長。「里沼文化」を活かした「うどん」や「麦落雁」に代表される名産品が創出され、おもてなしに花を添えた。

(1) 水辺と台地が育む風土

館林市内には多くの池沼が存在している。それらの池沼は地域の生活と深く結びつき、人と自然との交流によってその景観と豊かな生態系が維持されてきた。「里山」と同じく、これら市内にある沼を「きとぬま里沼」と呼ぶ。

人々は地形を巧みに利用

し、その特性を生活に活かした。市内の地形はおおむね平坦であるが、高台である洪積台地やその縁辺部など、自然災害の少ない場所に集落を築き、畑作を行った。周辺の沼地や湿地、河川などの低地では漁撈や採集が行われ、古墳時代からは、になるとそこで稲作を行って生活の糧を得



写4-1 茂林寺沼湿原の葦を活用した地域の年中行事（堀工区）

た。先人が水辺と台地双方の恩恵を受けて築いた風土と文化は、本市の歴史文化の特性の基盤となっている。

(2)「境目」の地域*1の交通と交流

関東地方中央部に位置する館林市は、古くは下野国(栃木県)・武蔵国(埼玉県)との「境目」であった。周辺に往来を阻む山はなく、渡良瀬川対岸の下野国、利根川対岸の武蔵国と、国境を越えた交流が盛んであった。



写 4-2 渡良瀬大橋
(館林市と栃木県の境)

これら近隣地域と本市は街道や渡し・舟運で結ばれ、地形や気候、風土が似ていることから

も、互いに活発な交流をもつ生活圈・文化圏が形成された。また、近代以降は舟運や鉄道で直接東京と結ばれたことで、本市にとって東京はさらに身近な場所となった。今も通勤や通学、買い物などで東京へ行く人は多い。

このような交通の条件や活発な交流は、県都(前橋市)より東京に近い県内でも特異な地理的条件とも相まって、国(県)境にとらわれない、「両毛」*2に代表される地域意識を持った本市の特性を形成した。

* 1 【「境目」の地域】

ここで定義する「境目」の地域とは、国(県)境の地域でありながらその境に捉われず、様々な手段を用いて多くの地域と活発に交流を行い、その成果を反映した個性豊かな生活や文化を形成した地域のことである。

本市は国(県)境の地域にあって、隔絶の側面も併せ持つ河川や街道を利用し、東京(江戸)など遠方地域とも交流を行うことで、現在に至る歴史文化の特性を形成した。



図 4-1 戦国期関東主要城郭位置

* 2 【両毛】

群馬・栃木両県は古墳時代には「毛野」と呼ばれ、6世紀以降に「上毛野(国)」(群馬県)と「下毛野(国)」(栃木県)、8世紀以降には「上野国」(上州)・「下野国」(野州)とされた。

広義の「両毛」は「群馬県域(上野国)」と「栃木県域(下野国)」、狭義には現在の「群馬県東部」と「栃木県南部」にまたがる地域を指す。ここでの「両毛」は、狭義のものとする。

狭義の「両毛」が定着した契機は、織物産業の隆盛に伴う明治20年(1887)に群馬県と栃木県とを結ぶ「両毛鉄道」の開通と推定される。現在も行政や経済、文化、教育など多方面で県境を越えた強い結び付きを築いている。



図 4-2 両毛地域の範囲(狭義)

(3)館林城と城下町

館林城の存在を示す最も古い史料は、室町時代の文明3年(1471)のものである。国境に立地したため、戦国時代には多くの戦を経験した。天正18年(1590)に徳川家康が関東に入国すると重臣の榊原康政が配置され、以後、江戸時代には、徳川綱吉が5代将軍に就任する前にこの地を治めるなど、親藩・譜代の大名7家が統治した。



写 4-3 市指定史跡「館林城本丸土塁」

館林に入封した康政はそれまでの城と城下町を近世城郭として整備した。その町割や寺院の多くは今も残され、中心市街地の基礎となっている。

城下町には日光脇往還などの複数の街道が交差し、人々の交流が生まれた。商工業も発達し、地域経済の中心地となった。そうした城下町の発展は、経済から文化まで物心両面に及んだ。

近世から現在に至る本市発展の礎となった館林城とその城下町の痕跡は、特に現在の中心市街地に建造物や社寺など有形のもののほか、祭礼、習俗、人々の生活など、多様な形で残されている。館林城と城下町が残した歴史文化は、本市の特性を表すものといえる。



図 4-3 江戸時代後期の館林城と城下町の概略図

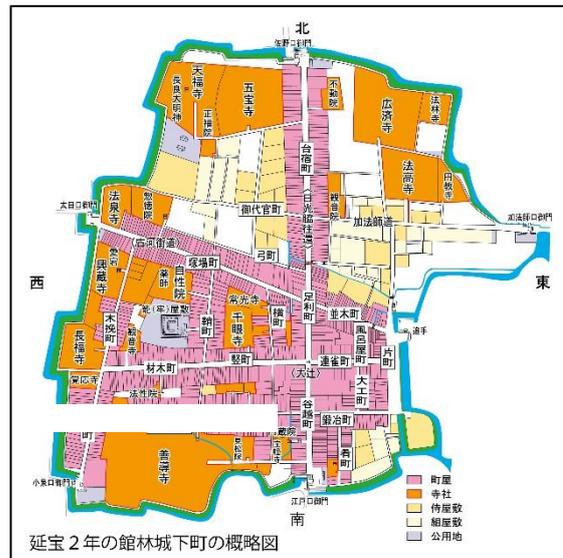


図 4-4 延宝2年の館林城下町の概略図

(4)近郊都市文化の発展と賑わい

明治以降の館林では、かつての城下町を中心に近代化が進んだ。それに伴う産業の発展は工場や事務所で働く勤め人を増加させ、それらの人々が暮らしの場とした旧城下町地域には利便や娯楽を提供する店舗が現れ、町並みにも変化が生じた。

明治40年(1907)の東武鉄道の開通によって、遠方からも多くの行楽客が本市を訪れるようになった。

館林出身の文豪^{たやまかた}田山花袋は、著書『東京近郊一日の行楽』(大正12年(1923))で、東京から1～2日で気軽に行ける「都会と野の接点」を「近郊」と呼び、好んで旅行をした。同書には本市も「近郊」の1つとして取りあげられ、広く紹介された。



写 4-4 『東京近郊一日の行楽』

産業の発展と近代化による変化は、もてなしの場として花街が形成される契機ともなり、近郊都市の館林に賑わいと新たな文化を生み出した。

花袋のいう「東京近郊」、そして「都会と野の接点」として、都市と田舎(自然)という本来相反する要素が混じり合って生まれた歴史文化は、本市の特性を表すものといえる。

(5)館林の名所・名産品

本市を代表する名所、国指定名勝「躑躅ヶ岡(ツツジ)」は、近世の頃より城主から庶民まで多くの人々に愛され、整備や管理、行楽の記録が残されている。鉄道開通で遠方からの行楽客も増え、その繁栄は市の発展に大きな影響を与えた。

伝説「分福茶釜」あるいは童話「文福茶釜」の舞台、茂林寺には開山から現代まで多くの文化財が残る。茂林寺沼や湿原との関係も深く、人と自然が共存した記録を今に伝える。

本市名産品の「うどん」は、市内で盛んな麦作や、周囲に沼が多く急激に乾燥しない気候など、うどん作りに適した環境が生んだものといえる。明治37年(1904)の『群馬県営業便覧』には、市内に「うどん屋」、「素麺商」、「素麺屋」、「饅頭飲食店」といった表記の店を見ることができる。



写 4-5 ^{ひやしる}冷や汁うどん*

小麦の製粉技術は近代産業としても成長し、本市の近代化と発展の大きな原動力となった。うどんのほかにも

「麦落雁」「麦ようかん」などの菓子、醤油など、麦に関連する特産品は数多い。

これらの名所・名産品の誕生や発展の背景には歴史・風土・社会情勢が密接に関連しており、本市の歴史文化の特性を反映したものといえる。

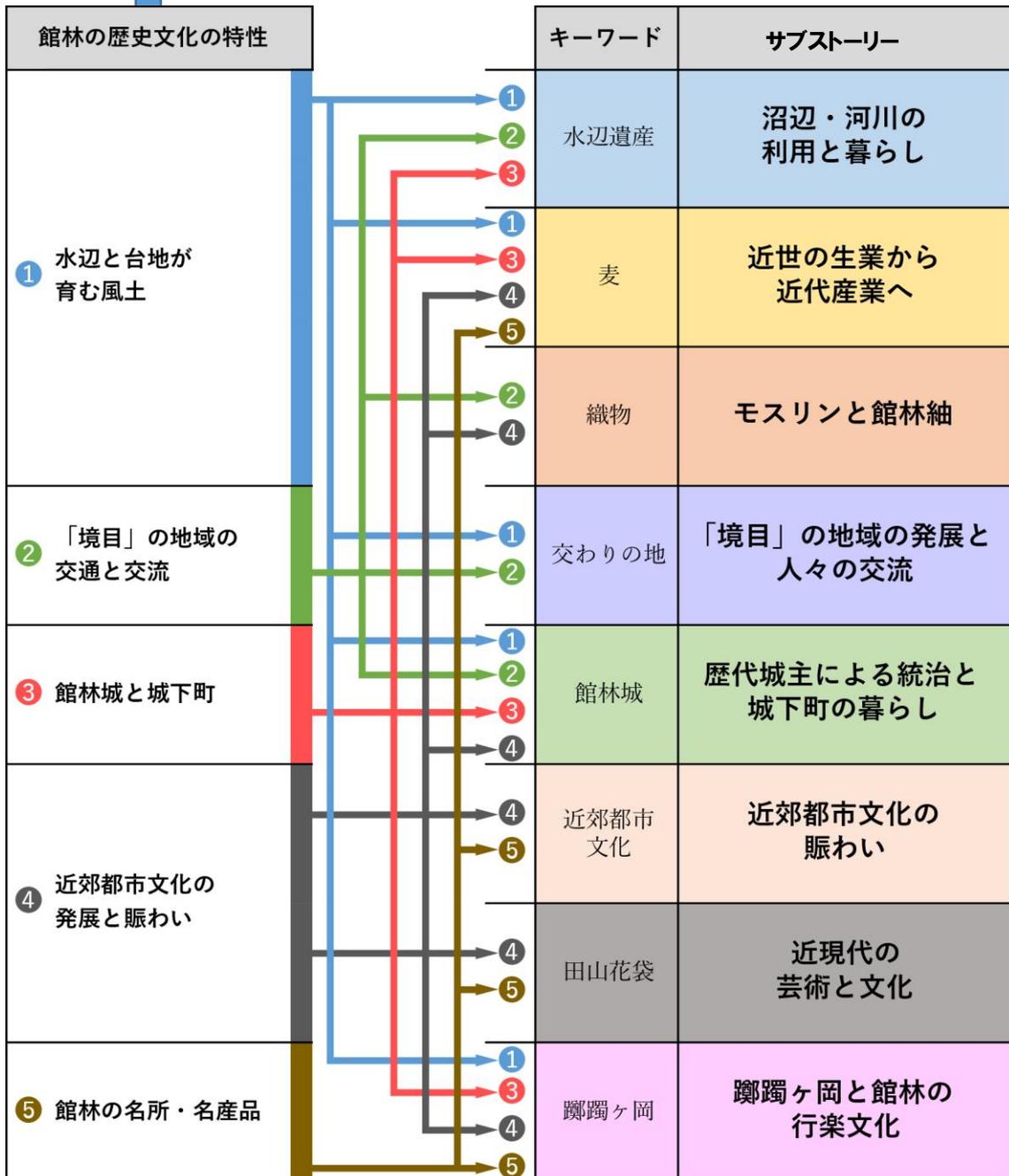
* 2 【冷や汁うどん】

煎りゴマにシソの葉や味噌などを加えてすり混ぜ、塩もみしたキュウリや刻みネギを入れた冷たい汁で食べるうどん。

2] 八つのサブストーリー

「里沼文化」にまつわる市内にある複数の文化財を、有形・無形や指定・未指定にかかわらず対象とし、その特性から抽出された八つのキーワードをもとに掘り下げ、サブストーリーを設定した。サブストーリーは、①沼辺・河川の利用と暮らし、②近世の生業から近代産業へ、③モスリンと館林紬、④「境目」の地域の発展と人々の交流、⑤歴代城主による統治と城下町の暮らし、⑥近郊都市文化の賑わい、⑦近現代の芸術と文化、⑧躑躅ヶ岡と館林の行楽文化の八つである。

里沼文化



サブストーリー① 沼辺・河川の利用と暮らし



漁撈

下休泊堀

渡良瀬川

市内の谷底平野に点在する多くの「里沼」や、^{わたらせ}渡良瀬川・^{かた}谷田川などの河川は、本市の歴史文化に大きな影響を与えてきた。田畑の用水として、あるいは漁撈の場として、人々に多くの恵みをもたらし、その生活を豊かなものとした。人々はそれらの環境を守り、また、使い易くすることで今に伝えてきた。代表事例ともいえる、中世に開削され現在も利用されている「休泊堀」は、渡良瀬川と多々良沼を水源とした用水路であり、流域の沖積平野を肥沃な農地にした。江戸時代には良質な地下水を利用した酒造りも盛んになった。「里沼」や河川と人々は共生関係にあり、これら水辺の四季折々の景観は、多くの市民にとってふるさとの原風景となった。

一方で、水辺の環境は洪水や排水不良による滞水により、時には人々の脅威ともなった。これを克服する暮らしの知恵として、市内には水塚や揚げ舟が生まれた。近代、渡良瀬川の^{たなかしょうぞう}鉍毒被害と闘った田中正造に関連する文化財も、水との闘いを示す歴史文化の一つといえる。

これらの沼辺・河川の利用と暮らしに関連する歴史文化を、本市の特色を語るサブストーリーとして捉えた。

<サブストーリーに関する主な要素>

項目	モノ・コト（指定・登録・未指定文化財）	ヒト
自然	^{じょうもうたてばやししろぬましよきんすいそうぞう} 茂林寺沼及び低地湿原【県】、 ^{じょうもうたてばやししろぬましよきんすいそうぞう} 上毛館林城沼所産水草図【市】、城沼、多々良沼、近藤沼、渡良瀬川、谷田川	
川魚・漁撈	漁法、漁撈道具、川魚料理、	^{あきもとゆきとも} 秋元志朝
生活・信仰	竜神伝説、水神信仰、城沼開墾、城沼墾田碑、 ^{やまだうとじ} 山田烏兔二君碑	^{たなかしょうぞう} 田中正造 ^{おおやきゅうはく} 大谷休泊
水の利用	^{せいしあきもとぐう} 生祠秋元宮【市】、 ^{たなかしょうぞう} 田中正造の墓および ^{きゅうげんどう} 救現堂【市】、水塚、揚げ舟、 ^{うんりゅうじ} 雲龍寺、 ^{きゅうはくぼり} 休泊堀、 ^{せいの} 大谷休泊の墓【県】、 ^{みつか} 分福酒造店舗、 ^{あぶね} 清水屋酒造、龍神酒造	^{やまだうとじ} 山田烏兔二



多々良沼



国登録有形文化財
「分福酒造店舗」



龍神酒造



県指定天然記念物
「茂林寺沼及び低地湿原」



川魚料理



市指定史跡
「救現堂」(雲龍寺)



市指定重文
「上毛館林城沼所産水草図」

サブストーリー② 近世の生業から近代産業へ



麦作

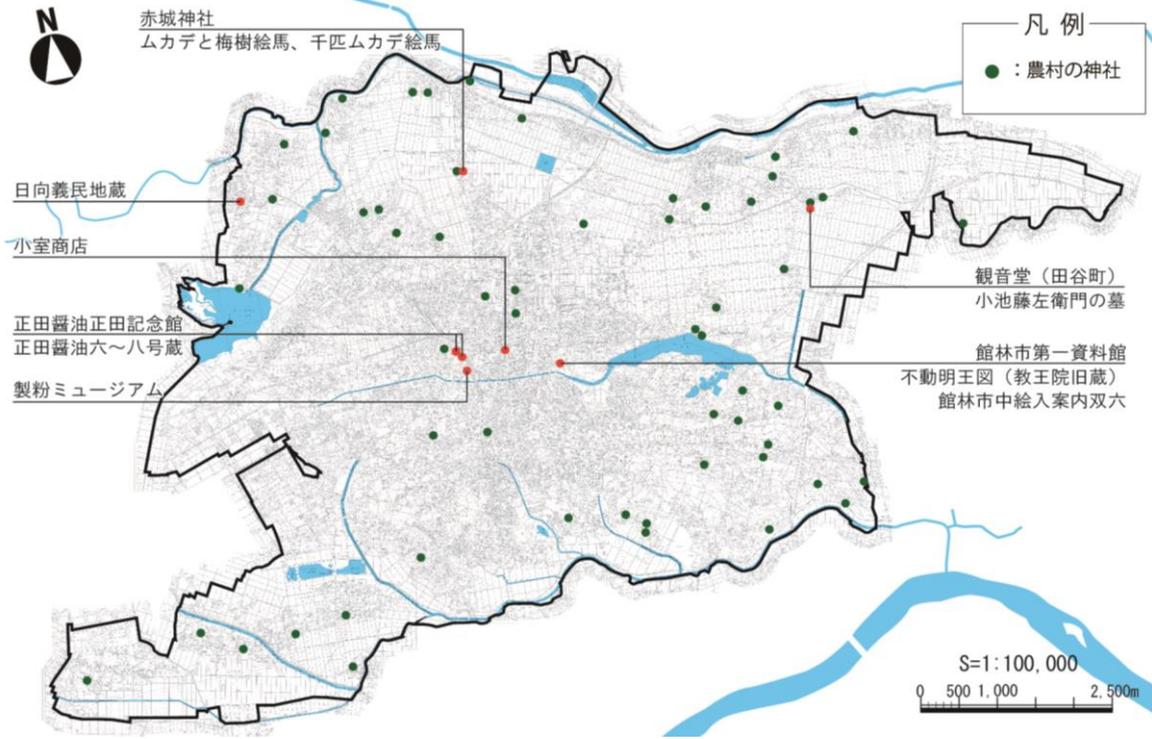
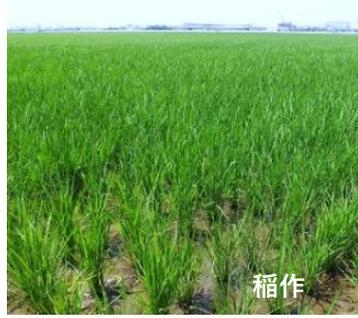
館林市は、戦後に「群馬のウクライナ」とも呼ばれた豊かな穀倉地帯である。この地に暮らした人々は、大地を耕し、河川などの水資源を巧みに利用することで、米と麦の二毛作を可能にした。

中でも麦は江戸時代から館林藩の名産品として知られ、それを加工したうどん粉は将軍家への献上品ともなった。明治時代には日本の製粉業を牽引した日清製粉が本市で生まれ、原料に小麦を使用する醤油醸造業も発展した。これらは現在の本市の主要産業の一つである食品産業の発展へとつながっていった。うどんなど小麦粉を使った各種の郷土食は、今でも市民生活に溶け込んだ身近なものであり、本市を代表する産品、お土産としても有名である。

近世の生業から近代に産業として発展し、現在も主要産業として、あるいは身近な郷土食や名産品として生きている、主に「食」に関わる歴史文化を、本市の特色を語るサブストーリーとして捉えた。

<サブストーリーに関する主な要素>

項目	モノ・コト (指定・登録・未指定文化財)	ヒト
米関連	農具(ヒキドイ)、陸田、ポンプ小屋、陸稲(オカボ)、年貢割付状、二毛作	
麦関連	農具(フリボウ、麦踏ローラーなど)、 麦の郷土食(麦落雁、うどん、冷や汁など)、赤城おろし	松澤織部
製粉業	製粉ミュージアム	正田貞一郎 南條新六郎
その他の近代産業	館林市中絵入案内双六、 正田醤油正田記念館 、 正田醤油六号 、 同八号蔵 、小室商店、小室家日記	正田文右衛門 小室良七
生活信仰	不動明王図(教王院旧蔵) 【市】、 ムカデと梅樹絵馬 【市】、 千匹ムカデ絵馬 【市】、 長良神社 ほか農村の神社、 日向義民地蔵 【市】、大谷神社農耕図絵馬、駒方神社農耕絵馬、小池藤左衛門の墓、雷電信仰	



サブストーリー③ モスリンと館林紬



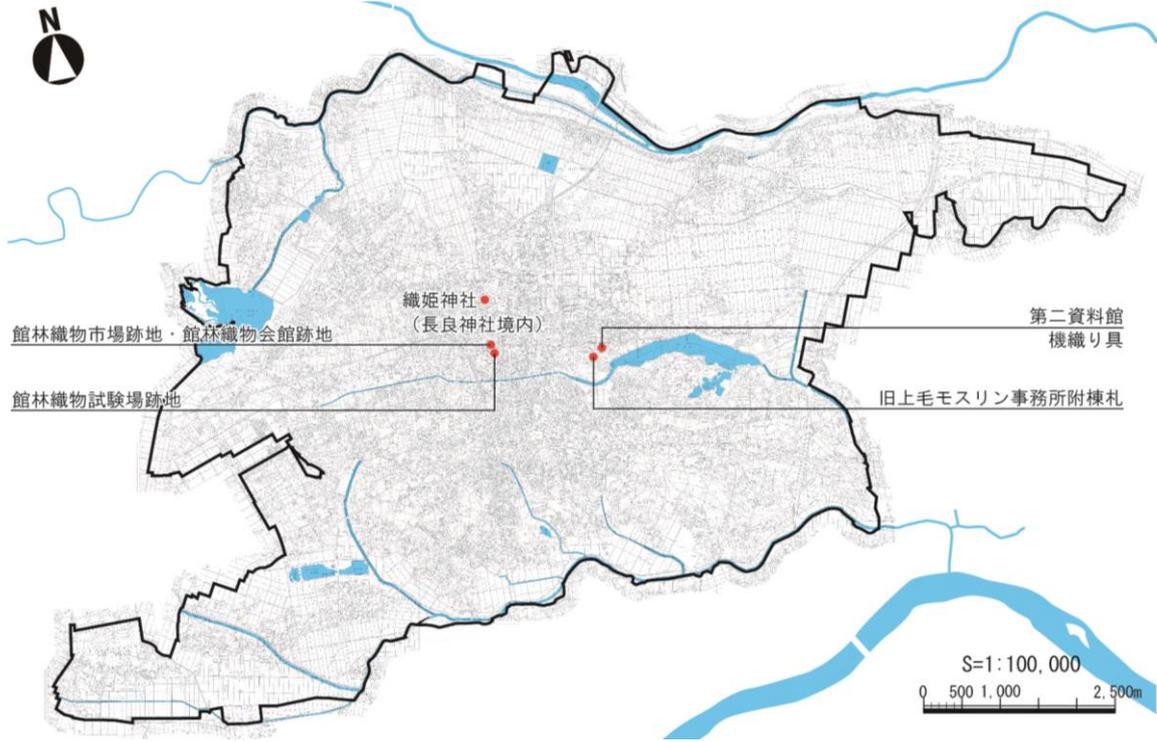
館林紬

館林市域では農家の貴重な現金収入源として養蚕や綿栽培、各戸での機織りが行われていた。明治時代に上毛モスリン株式会社が設立され、織物市場(邑楽織物同業組合)ができたことにより、地場産業であった織物はその規模を拡大して近代産業となり、館林市の発展に大きく貢献した。館林市の名産として知られる「館林紬」は、軽くて肌触りが良く丈夫で腰のある綿織物として親しまれた。

製粉業や醸造業と異なり、現代の織物業の規模は盛んであった頃よりかなり小さくなっているが、館林市の近代の発展を語るうえで欠かすことのできないものである。隣接する栃木県や埼玉県、また群馬県内の織物産業との関連も興味深いものであることから、本市の特色を語るサブストーリーとして捉えた。

<サブストーリーに関する主要要素>

項目	モノ・コト (指定・登録・未指定文化財)	ヒト
織物関連	中野 紘、機織り具、綿屋仲間資料(松本家文書)、賃機、 旧上毛モスリン事務所附棟札【県】、平塚織物の建物、織物組合、織姫 神社、館林 紬	荒井藤七 鈴木平三郎 荒井清三郎



サブストーリー④ 「境目」の地域の発展と人々の交流



市指定重要無形民俗文化財
「大島岡里神代神楽(太々神楽)」

群馬県(旧上野国)と栃木県(旧下野国)、埼玉県(旧武蔵国)との国境付近に位置する館林市は、古来より多くの人や物が行き交う地であった。江戸時代には日光脇往還・太田街道・古河往還・小泉道・藤岡道などの街道が城下町で交差していた。舟運は特に物流面で大きな役割を果たし、渡良瀬川に下早川田河岸が置かれた。明治時代には蒸気船が登場すると下早川田河岸にも寄航するようになり、鉄道が開通するまでの間、東京との往復に利用された。

「境目」地域の特性はこうした交通の要衝としての性格のみならず、人と人、地域と地域の交流にも表れている。伝統芸能の市指定重要無形民俗文化財「上三林のささら」は埼玉県行田市から、市指定重要無形民俗文化財「大島岡里神代神楽(太々神楽)」は栃木県佐野市から伝わったとされる。また、館林の地形を形づくる台地と低地の境目である縁辺部には多くの遺跡が残され、本市に暮らした人々の先史時代からの足跡を残している。

現在も東武鉄道などの利便性を活かして東京への通勤・通学者は多い。県都である前橋市よりも東京都に近く、栃木県足利市や佐野市と一体となった「両毛」地域の意識を育んだ特異な地理的条件は、国(県)境にとらわれない本市の特性を形成した。

本市の立地特性に基づく「境目」の地域に関連する歴史文化を、本市の特色を語るサブストーリーとして捉えた。

<サブストーリーに関する主要要素>

項目	主なモノ・コト (指定・登録・未指定文化財)	ヒト
台地縁辺部	大袋Ⅰ・Ⅱ遺跡、加法師遺跡、間堀1遺跡、北近藤第一地点遺跡、松沼町遺跡、 山王山古墳【市】	徳川家康 榊原忠次 源義経
街道と舟運	日光脇往還、 千塚の判官塚【市】 、街道沿いの道標、渡良瀬大橋、館林町本陣間取図、早川田河岸関係文書	
生活信仰	上三林のささら【市】 、羽附のささら、木戸のささら、 大島岡里神代神楽(太々神楽)【市】	



市指定史跡
「千塚の判官塚」



日光脇往還



市指定重要無形民俗文化財
「上三林のささら」



羽附のささら



木戸のささら



市指定史跡「山王山古墳」



松沼町遺跡 (炭焼窯跡)



多々良沼遺跡
出土遺物 (鉄滓)

サブストーリー⑤ 歴代城主による統治と城下町の暮らし



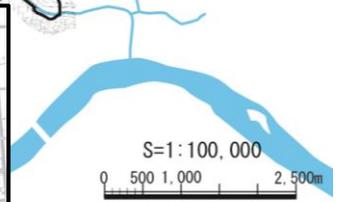
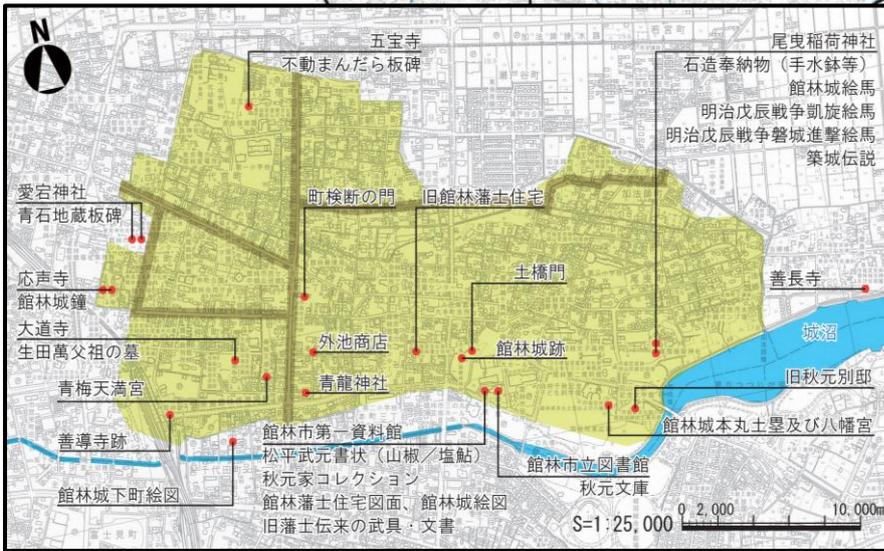
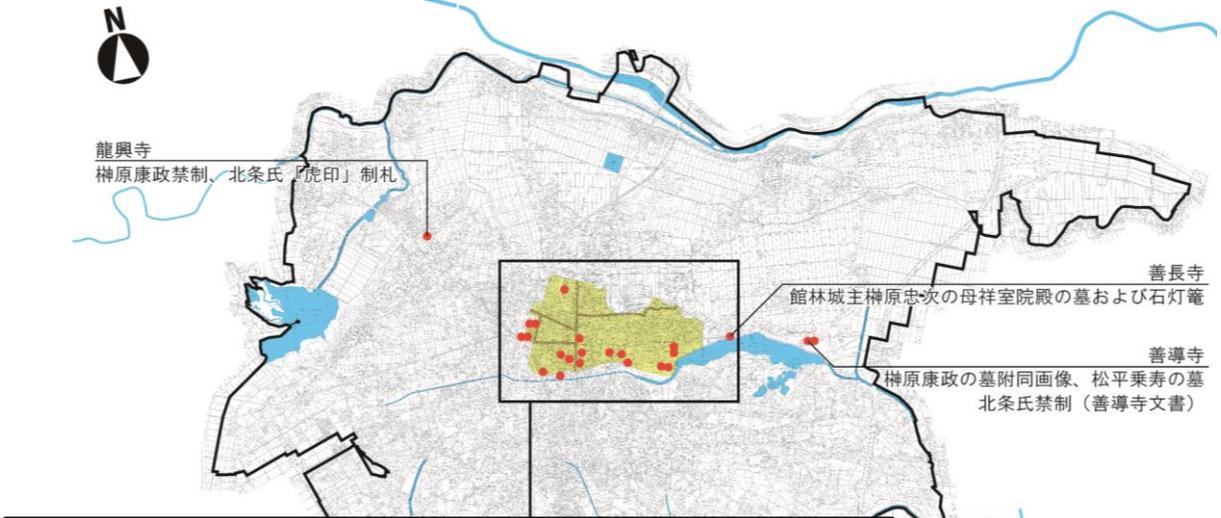
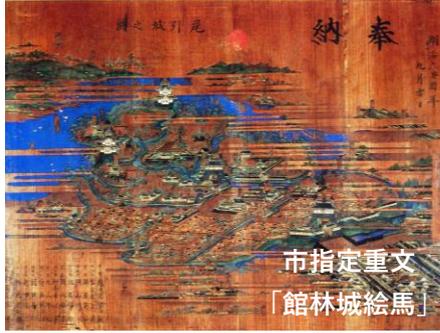
中世に築城された館林城と城下町は、近世に入封した榊原康政さかきばらやすまさによって新たに整備された。それらは時代を越え、現在まで続く中心市街地の基礎となっている。

城下町は本市と周辺地域における経済の中心地となり、多様な商工業の集積地として機能し、地域経済の成長を支えた。同時に、農村地帯とは異なる都市としての文化を形成する場ともなった。本市の指定・登録文化財の中で最も多くを占めるのは、近世の歴代城主や館林城(藩)、城下町に関係するものであり、歴史文化の面からもその影響は色濃く残っている。

現在の市街地にも康政が整備した当時の町割りは残され、要所に配された社寺の多くも存続しており、現代を生きる我々とのつながりも強い。現在の歴史と文化の礎といえる、館林城(藩)とその城下町に関連する歴史文化を、本市の特色を語るサブストーリーとして捉えた。

<サブストーリーに関する主要要素>

項目	モノ・コト (指定・登録・未指定文化財)	ヒト
歴代城主	北条氏 <small>きたて</small> 掟書、北条氏 <small>きたて</small> 祭制(善導寺文書)、北条氏「虎印」制札【市】、榊原康政の墓附同画像【県】、館林城主榊原忠次の母祥室院殿の墓および石灯笼【市】、榊原康政祭制【市】、松平兼寿の墓、松平武元書状(山椒/塩鮎)【市】、徳川綱吉筆「芦鷺之図」、秋元文庫、秋元家コレクション、尾曳稲荷神社石造奉納物(手水鉢など)	歴代城主
館林城と武士	館林城跡【市】、館林城本丸土塁及び八幡宮【市】、館林城鐘【県】、土橋門、尾曳稲荷神社、館林城絵図、旧秋元別邸、館林城絵馬【市】、明治戊辰戦争警城進撃絵馬【市】、明治戊辰戦争凱旋絵馬【市】、生田萬父祖の墓【市】、旧館林藩士住宅【市】、館林藩士住宅図面、旧藩士伝来の武具・文書	いくたよるず 生田萬 いおうのそうしちろう 伊王野惣七郎
城下町の暮らし	町検断の門【市】、館林城下町絵図【市】、外池商店、城下町の町割り	青山家・小寺家
城下町の社寺	善導寺、応声寺、愛宕神社、青梅天満宮、青龍神社、初引稲荷神社、夜明稲荷神社、築城伝説、不動まんだら板碑【県】、青石地藏板碑【県】	あかひてるみつ 赤井照光



サブストーリー⑥ 近郊都市文化の賑わい



国登録有形文化財「旧館林二業見番組合事務所」

鉄道の開通により、本市と東京とは近世以前と比較にならないほどの早いスピードで行き来が可能となった。その影響は多岐にわたり、産業の発展と相まって、本市は近世の城下町から近代の近郊都市へと変化を遂げた。

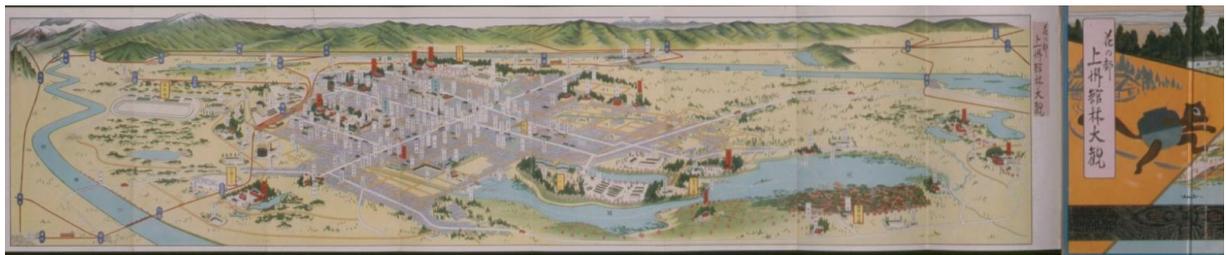
東京方面から多くの行楽客が館林を訪れるようになると、それらの人々を相手にした土産物屋や、仕出し弁当などを提供する料理屋が市内に増え、城沼の渡船も躑躅ヶ岡や尾曳稲荷神社を訪れるための観光利用が盛んになった。

また、日清製粉や上毛モスリンなどの産業の発達に伴って、これらの工場や事務所で働く勤め人が増加した。それらの人々は、市街地を暮らしの場とする新たな都市生活者であった。その生活に利便を提供する銭湯の増加や、娯楽を提供する映画館やカフェの出現など、市街地にも変化が現れた。また、企業などの接待、行楽客のもてなしの場として花街もでき、華やかな時代を迎えた。

本市出身の文豪^{たやまかた}田山花袋の作品にも描かれる、近代化していく近郊都市館林の賑わいと、その華やきを今に伝える歴史文化を、本市の特色を語るサブストーリーとして捉えた。

<サブストーリーに関する主要要素>

項目	モノ・コト (指定・登録・未指定文化財)	ヒト
鉄道	東武鉄道、駅舎(館林駅、茂林寺前駅、多々良駅、成島駅、渡瀬駅)、 渡良瀬川鉄橋、変電所、館林駅周辺の倉庫群	根津嘉一郎 <small>ねづ かいちろう</small>
娯楽	旧館林二業見番組合事務所、富貴座十五周年記念碑、 料理屋・割烹旅館(旧福志満旅館、旧清和園)、 芸能(館林音頭、館林小唄、)	石島コト 石島尊吉 家富忠三郎 <small>いしじま いしじま せんきち いえとみ ちゆうざぶろう</small>
都市の発展	旧館林市庁舎(館林市市民センター)	—



『花の都 上州大観』昭和9年(1934)

サブストーリー⑦ 近現代の芸術と文化

田山花袋旧居及び旧居跡附建家売渡証一札



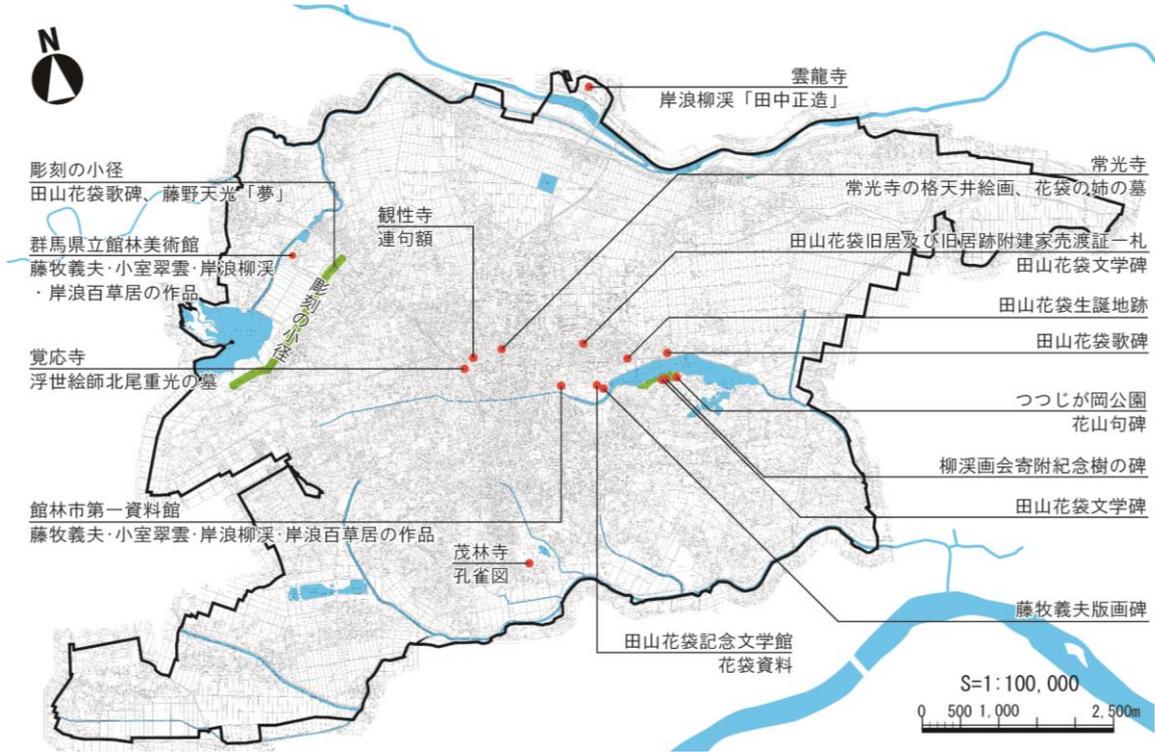
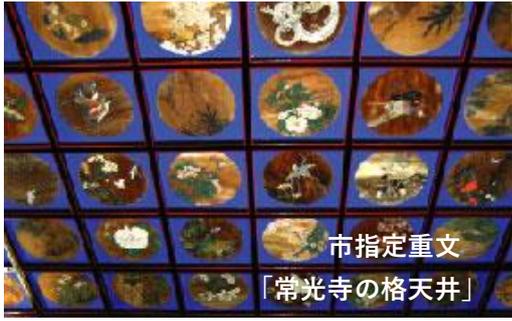
明治の新時代が訪れ、産業の発達や鉄道の開通によるまちの発展とともに、館林市は多彩な芸術家を生み出した。代表的な人物として、日本文学史に「自然主義」の時代を築いた明治の文豪田山花袋、近世から近代にかけて活動した浮世絵師北尾重光、南画の大家小室翠雲などがいる。

これらの作品や活動の足跡、あるいは作品のモチーフは、本市を含む両毛地域や利根川対岸の埼玉県北部にも多く残されている。これは、本市が「境目」の地域、交通の要衝として様々な地域と密な交流を持っていたことの、一つの表れと見ることができる。

主に近世の終わりから近現代に活躍した本市にゆかりのある芸術家とその作品、それらに関わる歴史文化を、本市の特色を語るサブストーリーとして捉えた。

<サブストーリーに関する主要要素>

項目	モノ・コト (指定・登録・未指定文化財)	ヒト
近現代の 芸術と 文化	【田山花袋】田山花袋旧居及び旧居跡附建家売渡証一札【市】、 原稿「ふる郷」他、花袋の姉の墓(常光寺)、田山花袋生誕の地、 田山花袋歌碑、文学碑、田山花袋記念文学館収蔵資料	北尾重光 田山花袋
	【北尾重光】浮世絵師北尾重光の墓【市】、相撲絵馬(正田記念館蔵)	小室翠雲
	【小室翠雲】常光寺の格天井絵画【市】、「孔雀図」(茂林寺蔵)、 「溪山幽邃図」	岸浪柳溪 岸浪百草屋
	【岸浪柳溪】柳溪画家寄附記念樹の碑、「田中正造画幅」(雲龍寺蔵)	荒井閑窓
	【藤牧義夫】藤牧義夫版画碑、「城沼の冬」(県立館林美術館蔵)、「隅田川絵巻」	藤牧義夫
	【荒井閑窓】旧対松亭、観性寺連句額、資料館蔵俳画作品、花山句碑	藤野天光
	【藤野天光】「ああ青春」、「光は大空より」、「時のながれ」、「人生」、「夢」	



サブストーリー⑧ 躑躅ヶ岡と館林の行楽文化



本市最大の観光資源として現在も多くの行楽客が訪れる躑躅ヶ岡(つつじが岡公園)は、中世から自生のツツジ群落として存在し、江戸時代には歴代の館林城主によって保護・育成された。庶民も花見を楽しんだ記録が残されており、古くから地域の人々に愛された場所であった。

明治に入って一時荒廃したが、地域の人々や群馬県令楢取素彦^{かとりもとひこ}などの尽力で復興を果たした。それ以後、鉄道の延伸により東京など遠方からも多くの行楽客が訪れる名所となった。『分福茶釜』伝説ゆかりの地である茂林寺や、「館林城築城伝説」が伝わる尾曳稲荷神社など市内の名所と合わせ、今も躑躅ヶ岡(つつじが岡公園)には多くの人が訪れている。

主に近世から近代に由来を持ち、鉄道など交通網の発達によってさらに発展した躑躅ヶ岡(つつじが岡公園)を始めとする館林の行楽に関わる歴史文化を、本市の特色を語るサブストーリーとして捉えた。

<サブストーリーに関する主要要素>

項目	モノ・コト (指定・登録・未指定文化財)	ヒト
名所・行楽地	「躑躅ヶ岡」【国】、つつじが岡公園、つつじ、つつじまつり、躑躅岡公園碑、城沼の渡船、お辻・松女の墓、つつじが岡の伝説	かとりもとひこ 楢取素彦 しょうほんこうたいごう 照憲皇太后 やすらおかぜんべい 安楽岡善平 すぎもとやよ 杉本八代 たにはなふくろ 田山花袋 いわずさなみ 巖谷小波
社寺と祭り	龍興寺、常楽寺、普濟寺、茂林寺、分(文)福茶釜伝説、徳川家光朱印状写、後柏原天皇綸旨 ^{ごかしわばらてんのうりみじ} 、普濟寺の銅鐘【市】、尾曳稲荷神社(尾曳講)、善長寺(十一面観音の縁日)、深諦寺(日限地蔵 ^{ひぎりぞう} の供養祭)、富士嶽神社(初山大祭)、駒方神社(弓取式 ^{ゆみとりしき})、子権現(大祭)	



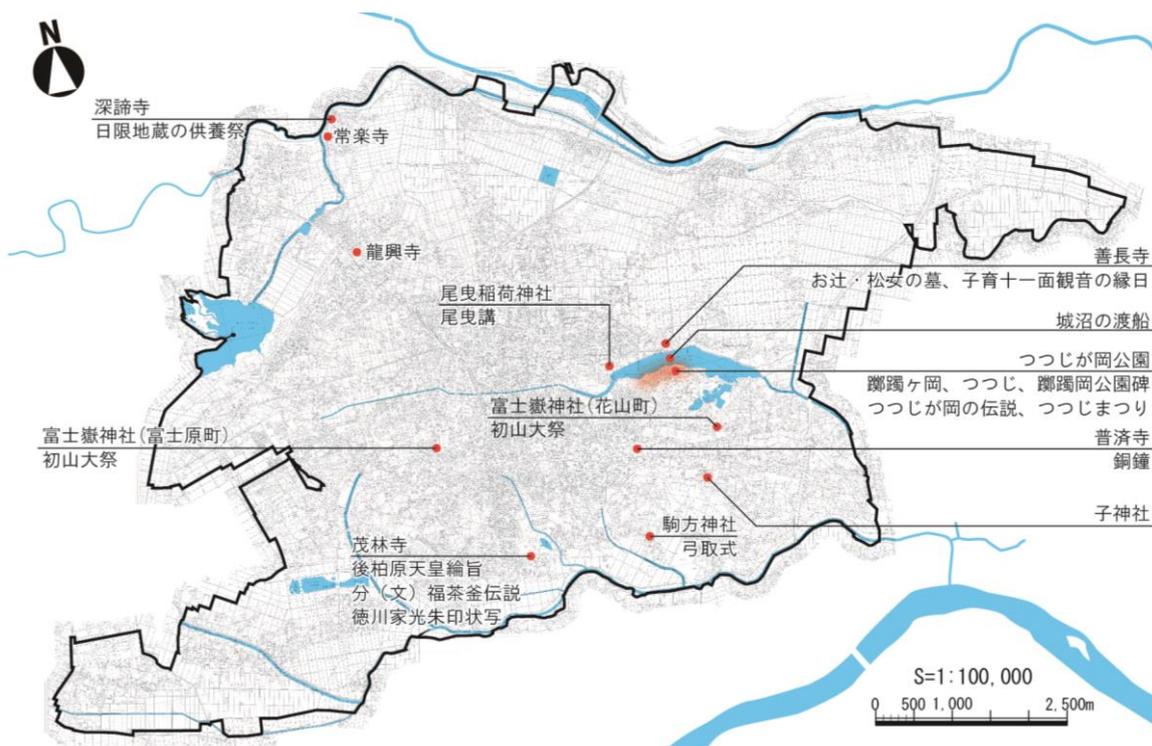
つつじが岡公園と城沼



つつじまつり



お辻・松女の墓



茂林寺



分福茶釜



富士嶽神社の初山大祭(花山町)



普濟寺



常楽寺



子神社(奉納された草鞋)